

町医者だより

平成20年03月号

<発行・お問合せ先>

おおわだ内科呼吸器科

院長 大和田 明彦

市川市南八幡4-7-13

シャポール本八幡2階

JR本八幡駅南口(シャポール改札口)

1分ミスタードーナツ並び

スーパーつるかめ(旧フレック)2階

電話047-379-6661

おおわだ
内科
呼吸器科

咳ぜんそくについて

長引く咳で医療機関を受診すると告げられる病名で以前取り上げたアトピー咳(20年1月号)とともに良く聞くのが「咳ぜんそく」という病名です。今月は「咳ぜんそく」の話です。

1979年から使われるようになった病名

起源となったのは1979年にニューイングランド医学雑誌に発表された論文です。16歳から40歳の6名の患者が「気道過敏」と「元に戻りうる気流制限」を持つことから喘息と診断されたのですが、ゼイゼイ(喘鳴)を伴わず長く続く咳が唯一の症状であったことから、それ以降、喘鳴を伴わず咳だけが目立つ喘息の一群を「咳ぜんそく」と呼ぶようになりました。

「咳ぜんそく」は喘息です

あたかも、「咳ぜんそく」が喘息とは異なるような印象を与えかねませんが、その時は喘鳴がないだけで、何年か後に出てくる例もありますし、もともと咳は喘鳴、息切れ、痰がらみ(気道分泌亢進)、胸の締めつけ感などとともに喘息の重要な症状の一つです。そのため「咳」だけに注目しなければならぬ理由が良く分かりません。気管収縮剤であるメサコリン吸入に対する反応がゆっくりで通常みられる喘息と多少異なるとの指摘もありますが、起こっている現象そのものは同じです。

「咳ぜんそく」は小児期の喘息の特徴

最新の世界標準の喘息治療ガイドライン2006年版のGINAは1ページ2段組でびっしりと書かれた109ページの英文ですが「咳ぜんそく」の記述はわずか12行です。もしかしたら日本だけが騒ぎして使用している病名なのかもしれません。注目すべきは「咳ぜんそく」が小児期によくみられると記載されている点です。つまり小児期の喘息では咳(特に夜間の咳)が目立つ症状だということで日常拝見しているお子さんも咳の症状が目立ちます。よくゼイゼイしないので喘息ではないのではと質問されますが、小児でも成人でもゼイゼイ(喘鳴)は喘息としての特異度は高いが(診断に有用だが)感度が低い(いつも認められる訳ではない)ことが知られています。ゼイゼイする喘息は多くないことを知っていただきたいと思います。

以上の事から、紛らわしい「咳ぜんそく」という病名を使用せず「喘息」という病名を使用すべきではないでしょうか。